大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

初年次ゼミナール６年め：学生は何を学んだのか？

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀江, 珠喜 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005844

初年次ゼミナール６年め～学生は何を学んだのか？

堀江　珠喜

初年次ゼミナールを担当して６年めとなる。学生の能力や興味に合わせながら進めてゆくという現場対応的な姿勢は保ちつつも、「エリートを目指す者には何が必要か？」を考えるという同じテーマを掲げているため、マニュアルが、自然に確立してきたようだ。例年通り、工学研究科の綿野教授から２名の優秀な院生（今年は２名とも女性）をTAとして紹介していただいた。

従って初年次ゼミを扱う拙文にも、重複する箇所が少なくないと思われ、今年は執筆を控えるつもりであった。だが、敢えて文字として残す気になったのは、中国人男子留学生Ｌと、８年前に来日して以来、日本で教育を受けてきた韓国人男子学生が参加してくれたおかげで、これまでとは（良い意味で）少々異なる雰囲気と成果を感じたからだ。

そこで今回は、私が何を教えたか、ではなく、ゼミ生たち14名が何を学んだのか？という視点から、記したい。執筆には、定期試験での質問「このゼミで学んだことについて」の回答を参考にした。

もちろん採点対象になる回答という性格上、学生がプラスイメージを心掛けて書いた可能性は否めない。だが無記名のアンケートとは違い、ある程度、自分の発言に責任を持たねばならないし、「つまらなかった」などというワン・フレーズ苦情ではなく「説明」が求められる。従って美辞麗句のみの羅列というわけにもゆくまい。また学生たちに、事実からかけ離れた内容を「創作」する能力があるとも思えないのである。

工学域男子学生Sは、この定期試験問題について「自分が受けた授業や自分のした行動・思考を思い返すことで、自分自身を評価することができ、自分の今後の課題や自分に不足している所を発見することができた」と記す。私の定期試験には「授業のまとめ」の意味合いも含めているので、その目的は果たせたと思われる。

〈日本語が劣っても積極的〉

今年度のゼミで、もっとも印象的な学生は、いつも微笑を絶やさない中国人留学生Ｌだった。例年通り机を円形に並べお互いの顔を見ることができるため、私のみならず、おそらくこのゼミを受けた誰もが彼の温厚そうな表情に、ある種の癒しを感じたに違いない。

誤解を恐れずに言わしてもらうなら、一般論として担当教員にとって、留学生の存

在がクラスの中で、とても有り難いとは思えないこともあるだろう。文化や考え方が違う以前に、日本語能力（英語クラスでは英語能力）が、日本人学生よりかなり劣り、正直なところ扱いに悩むこともこれまであった。

このゼミでも、最初の授業で順番に自己紹介をさせたときに、Ｌについては心配した。果たしてこのゼミの内容を理解して学んでくれるだろうか？

だが、２回めと３回めにエリートの条件について受講生全員に発表させ、討論させるや、これが杞憂とわかり、回を増すごとに、頼もしくなってきた。日本人学生に比べて、日本語の語彙は少ないが、このゼミで最も積極的に発言したのがＬなのである。

また、日本人学生が、関西弁はもとより、いわゆる若者言葉や、ら抜き言葉を使うこともあるのに対し、Ｌのほうが文法的に正しく美しい日本語を話すのにも（留学生の日本語は、大抵そうなのだが）改めて感心した。

では、このＬは、私のゼミで何を学んでくれたのだろうか？

彼は「発表能力が上がった」と断言する。これはゼミという特殊な授業形態によるためだが、他の講義に比べて、かなり発言の機会を得たようだ。しかも毎回、準備に手間をかけて発表を楽しみ、私やゼミ生たちが、彼いわく「へんな日本語」を真剣に聞いたのが嬉しい旨、記している。

日本語の会話・執筆において、まだまだ彼は勉強する必要があるものの、現在の自分の日本語能力を駆使して、持論を展開する作業は彼に自信を与えたようだ。また、その一所懸命な勉学態度は、他の学生に良い刺激を与えてくれた。

韓国人の学生も熱心さでは劣らないが、Ｌに比べて生真面目なのか、持論をしゃべりまくるということはなかった。ただ、ふと軍事に話が及んだとき、何気なく私が彼に「貴方、徴兵義務はあるのですか」と尋ねると、これまた自然体で「18歳から30歳までで希望する時期に行けます」との答えに、日本人学生は驚きの表情を隠せない様子だった。それほど身近に「徴兵」が行われるということがショックだったに違いない。おかげで外の世界が、少しは実感としてわかってくれたかと思う。

そこでＬに、「中国の大学では、軍事演習はもうないのですか？」と訊いた。今は九州の大学教員となっている上海からの元本学女子留学生が、中国の大学で手榴弾を投げる練習をやらされ、最後の仕上げには本物を使うので怖かった話を20年くらい前に聞いたのだ。信じられないというのがＬの反応だった。

軍事演習はともかく、私にとって意外だったのは、Ｌがお家（つまり中国）事情を知らなさ過ぎることだった。たとえば中国のユダヤとも言われる客家についても、「それ、なんですか？　お客さん？」という認識なのだ。この傾向は彼だけでなく、私の今年度の英語クラスに在籍する２人の中国人留学生についても同様ではある。この２人に比べてＬは、ラスト・エンペラーの名、愛新覚羅溥儀を知っていただけましかもしれない。

〈日本における報道の自由度〉

それにしても中国人留学生と話したがる日本人が、中国文学や文化、歴史などに興味があっても、当の中国人がそれに応える知識に欠けるのは残念だ。中国本国では、情報収集に困難が伴うとしても、逆説的ながら、せめて日本留学中に、中国についてしっかり学んで欲しい。

もっとも、このような傾向は現代日本人にもうかがえるかもしれない。国際ジャーナリストたちを中心とした調査によれば、2017年版日本の報道自由度ランキングでは、世界で72位でＧ７中最下位、韓国の63位よりもかなり低い。（ちなみに中国は176位、北朝鮮は最下位の180位だが、両国とも自由をウリにしている国ではない。）

私自身も、これまで日本語では入手できない日本や日本人に関する資料を、英語で読んできた。これらが邦訳されても、意図的に省かれた部分が少なくない。第一、この期に及んでもなお、太平洋戦争の責任者について、まともに議論されず、報道もされず、である。他にも日本には報道のタブーがある。従って私自身は、「72位」に納得できるのだが、多くの日本人は意外に感じるのではあるまいか。

そこで過去５年のゼミでは扱わなかったが、今回は「日本に報道の自由はあるのか？」について、考えさせた。これも留学生や韓国人学生がいてくれたおかげの企画である。

ちょうどその前に３週間にわたり日本語版ではあるがニューズウィークの記事について発表させていた。ミャンマーにおける少数民族ロヒンギャに対する凄まじい迫害など、ふだん目にするテレビのニュースや新聞では得られないトピックスについても語られ、ショックを受けているであろう時期に、敢えてこの問題について考えさせたのだ。

当然ながらＬは、日本における報道の大いなる自由を認めるいっぽう、韓国人学生Ｈは、母国と日本では安倍政権に対する見方も異なり十分でないという意見であった。また、日本人学生の過半数は、私の意図を忖度してか、自由でない旨発言したが、why まで、つまりその原因までは考えられないようだった。

そもそも放送局は総務省の許認可が必要で、この段階で政府に逆らいにくくなる。さらに民放の場合はスポンサー企業が求めがちな高視聴率達成のため、教養・文化・ドキュメンタリーよりも、お笑い芸人を使った娯楽、スポーツ番組を制作する。もちろんスポンサー企業を敵に回すような番組は企画できまい。

唯一、視聴率も企業のご機嫌をも気にせず、制作費も使い放題で質の高い番組を提供できるはずのNHKだが、こちらは経営トップが政府に決められており、近年は、低レベルの番組によって、密かに政府の愚民政策に協力しているのかと疑いたくなる。

購読料と広告収入で成立している新聞は、放送よりも中立の立場を保てるのだが、子会社に放送局を抱えている場合、政府に逆らいたくないだろう。その点、週刊誌は、許認可とも無縁で、とにかく購買者数確保のため、新聞や放送局ができないスクープで勝負する。名誉毀損で訴えられることも、全く気に留めない。逆にそのくらい迫力のある内容でなければ、売れないことも自覚している。だからこその「文春砲」なのだ。

もちろん近年ではインターネットという全世界を瞬時に駆け巡るツールもある。だが、工学域女子学生Tは、「情報が操作・規制される中で正しい情報を手にすることが大切であるということも分かった」と記す。そこで、発表のため資料を集める際、インターネット以外に、図書館（本）利用の重要性に気付いた。「書籍化されることで本の内容にある程度の信憑性が保証され．．．調べたいテーマに関する本以外にも周囲の本に興味をもつことができ、より多くの深い知識が得られ」るためだ。

地域保健学域の女子学生Ｆも、「（このゼミで学んだことは）メディアの情報をそのまま受容するのではなく、自分で批判的に読み取るための力が必要だということである」と認め、さらには「日本で報道されていないことを知るには、ニューズウィークやタイム誌をはじめとした、主に英語で書かれた雑誌を読むことが有効であることを学び、情報を資源として捉え、積極的に世界の諸問題を知ろうとする高い意識を持ち続けることが重要であると考えるようになった」と自分の成長を語っている。

〈聞き手を意識した発表〉

調べた後には発表という作業が待っているのだが、「プレゼンテーションはもちろん、日常の話も、自分が言いたいことばかりではなく、相手が聞きたいと思う内容にするよう心がけること」と学生に教えるものの、これには高等技術を要する。場数を踏んで、慣れることがまず大切と考え、毎回、ほぼ全員に発表・発言をさせるのである。

ただし、パワーポイント使用禁止、白板や用意した紙媒体などの図表や絵、写真などは使用可。その理由は、パワーポイントを用いたプレゼンテーションを聞いて、面白いと私自身がこれまで感じたことが皆無だからだ。

しかるべき話術と内容があれば、ゼミレベルの発表では、あのような機械の必要はない。その上、パソコン操作のミスで時間を無駄に使われてはたまらん。学生には、まず、まともな情報をもとにきちんと考察し、堂々と語る練習が必要と思われるのだ。本学教員の中にも、パワーポイントがなければスピーチひとつできない困った方がいらっしゃるが、会合等で急に壇上での挨拶を頼まれたら断るか、醜態を晒すことになろう。

看護の女子学生Uは、「聞いている人に興味をもってもらうためには、相手にとっても関心のあるような事柄で、私的すぎない内容が良く、大事な部分は強調したりゆっくり大きな声で話したりすれば良いということがわかった」と、話し方のコツを多少は掴んだようだ。

工学域の女子学生Ｇも、「毎回の授業で、違うテーマではあるが、自分の考えを話したり、調べたことを発表したり、英語でスピーチを行ったりしていくと、回を重ねるごとに、どのように、どのようなことを話せば人が自分の話を聞き、興味をもってくれるのかが、感覚的にわかるようになってきた」とか。

前述Ｔは、「私がこのゼミで一番苦労したのは、自分の話に相手が興味を持つようにするにはどうすればいいかを考えることだった」としながらも、「授業でなんども

自分の調べたことや考えを発表し、ほかの人の発表や先生の話を聞いているうちに、自分の発表を客観的に見るようになった。発表する内容を考えるときに、その内容をほかの人が発表している姿を想像して、自分はその発表を聞いてどう思うか、どうすればより良い発表ができるのかを考えるようにしたのだ」と、意欲的に取り組んだことを振り返る。

〈新企画！　発表の後は全員で質問〉

さて昨年度までは、発表者に対する質問や討論は、希望者参加型で、積極性に欠ける学生をわざと排除した。本当にエリートを目指す者だけを対象にゼミを進める、落ちこぼれは拾わないという厳しい態度を見せたのだ。

ところが、今年は留学生や８年間の日本滞在者という「異分子」が入ってきたため、全員に発言と質問を強制することにした。「異分子」を排除する結果になっては、「差別」となり不適切な指導となるからだ。

たとえばニューズウィークの記事についての発表では、一人が終えるとそれについて全員に質問させた。興味のない話でも、尋ねなければならないとなると熱心に聞く。また、本質に迫った質問がカッコイイと自覚すると、そのような問題点を見つけようと懸命になる。さらに、同じ質問を繰り返すわけにゆかないので、順番が後に回ってくる学生には、いくつかのポイントをチェックする必要も生じる。もちろん発表者は、13の質問に答えられるように準備しなければならないので、その点でも、このシステムは良かったと思われる。

ただし、これには90分授業は短すぎる。一度休講したので、別日に補講するかわりに30分延長授業を３回行い、帳尻を合わせたのだが、２時間で気分的にゆっくりと、つまり重要な補足説明も削ることなく授業ができた。これも２時限めのクラスだったため昼休みを使えたという有り難い環境のおかげだ。ただし前週からその旨は伝え、ランチを持参させて食べながらの受講を認めた。（我が母校、神戸女学院大学院では、紅茶とケーキをいただきながらの午後の授業もあったし、神戸大学での博士課程では、元教養部長Ｋ教授研究室での授業が長引くと、ブランデーが振る舞われたものだ。）

定期試験の前週には、これもほぼ例年通り英語でのプレゼンテーションを行ったが、このときには90分授業で慌ただしく、質問は次の発表者にさせることにした。一般的に、次に当たると思えば、他人の発表など耳に入らず、自分の原稿に目を通しながら緊張して待っていることが多い。だが私のゼミでは、そんなことは許さない。そんな状態だからこそ、敢えて、気分を紛らわせる意味も込めて、質問用意係を命じるのだ。

今年は、昨年までの統一テーマはやめた。何について話しても良い、ということでテーマ選びから学習させることにしたのだ。これには、自分が語りたいことと、人が興味を持ってくれるテーマ選びと内容とのバランスを考慮するという作業が必要となる。さらに自分の英語力もさることながら、聞き手のリスニング能力をも想定しなけ

ればならないのだ。当然ながら発表では「話すこと」よりも「聞かせること」のほうが大事なのだ。また聞く方も、質問の義務が生じれば必死になって内容を理解しようとする。

工学域の男子学生Wは、プレゼンテーションの機会の多い中学・高校へ通ったそうだが、彼自身の「聞く姿勢はとても良いとは言えなかった。発表時と違い聞いているときに内職をしたり寝たりしていれば勝手に終わっているという感じだった。そこまでしなくてもボーッとしているだけだったりと全然発表が頭に入るような状態ではなかった。だから自分の発表がさっさと終わると後はほぼ授業に参加することもなかった」とか。ところが、このゼミでは全員が質問をしなければならないので、「しっかりと聞いていればおもしろいと思うような発表もあり、また聞く態度も良くなる」と、ゼミの方法が有意義であることを確信している。

もっとも、私は毎年、ゼミの初期段階から、what を知るだけでなく why と how まで考えるようにと繰り返していた。発表では、what のレベルの語りがほとんどなので、why か how、つまりなぜそのような問題が起きたのか、ではどのような解決方法があるのかという視点で質問すれば、双方がより深く考える契機になっただろう。

また発表者は、質問を想定して答えをある程度用意する必要もあるのだが、「それは書いてありませんでした」で、済まして平気な学生もいる。もちろん数字が求められるなら、考えてもわかるわけがない。だが「女性管理職は男性管理職に比べて危機に強い」とのテーマでの発表に対し、「なぜ女性管理職は男性管理職よりチャレンジ精神があるのか」との質問なら、多少は持論を展開して欲しかった。（女の私が実感として思うには、専業主婦になる道もあったのに、敢えて男性中心社会でキャリアを目指す女性は、初めからチャレンジ精神に恵まれていたのだ。ちなみにこのテーマでの発表者も女性だった。）

その点、前述のＳは、「質問をされる事が知らされていたので、それに答えるために情報を調べた後に疑問を持ったことをより詳しく調べ、考えることで、一歩踏み込んで取り組むことができた。従って、何か発表やスピーチをする時には質問される事を意識して調べるとより深い理解につながるとわかった」と、自らの進歩を確認している。

さらに、他者の発表を聞かせるために、授業の最後に「ベスト・スピーカー」の投票を行ったこともある。もちろんその旨、授業の冒頭で告げておかねばならない。これはこれまでのゼミでも行ったことだが、できれば、無記名投票ではなく、口頭でしかるべき理由とともにその名前を言わせることが好ましい。すると、聞き手にアピールするには何が必要かを考え、理解し、次の発表に役立てられるのである。

〈皆違って、皆良い！〉

他者の発言、や発表、議論（というほどのやりとりをさせた認識は私自身ないのだが、学生たちにとっては、あの程度でも新しい経験だったらしい）を聞いて、前述の

Uは「皆違って皆良い」と実感したらしい。「個性的な意見を出すほうが、周囲への刺激にもなって良いことだと思った」とある。

個性が大事と言いながらも、本質的に「同化」や「単一化」の好きな農耕民族的日本人が多い我が国において、このような感想は得難いものだ。なにしろ府大の英語科目に対して、６～７年前に副学長から教科書の統一を提案されたほど、本学においても「皆、一緒」が好まれる傾向が無きにしも非ずだが、それで研究においての斬新な発想を求められても叶うまい。

他にも異口同音に、自分とは違う視点、考え方を知ったことで、学生全員の発言の意義を認め、私のダイナミックなコメントや説明に学ぶことが多かった旨、述べている。

７月に入ってからだが、「必要か否か？　カジノ、女性宮家、そしてリニアモーターカー」について考えさせたのだが、意見は要・不要のほぼ２つにわかれた。ただ両者とも、ほとんどが世間の有識者やらコメンテーターなどの発言の受け売りばかりで、予想していた結果とはいえ、私は心の中で溜め息が出た。前述のUも、これらについて「その記事を論じている人の考えについ流されてしまった」とか。

ひとつ（失礼ながら）笑えたのは、前週にこの課題を出したとき、中国人Ｌが「先生、カジノって何ですか？」と質問したことだ。日本でのカジノ解禁は中国人利用者を当て込んでいるというのに、この反応はあまりにも意外である。ちなみにＬは中国の大都市出身。紛れもないシティボーイなのだが。

また、女性宮家について反対の女子学生が、極左も腰を抜かしそうなユニークな説明をしてくれた。「自分が天皇になりたくて、とんでもない男性が女性皇族に近づき結婚するかもしれないから」というものだ。女性宮家反対論者のおおよその反対理由は「それが女性天皇、ひいては女系天皇を認めることになる」であるが、この学生はどんな調べ方をしたのだろうか？

ついでに女性宮家設立論の背景には、宮家の減少があるのだが、その理由を尋ねたところ、即座に「戦後ＧＨＱにより多くの宮家が廃されたから」と答えたのは、なんと韓国人学生だった。情けないぞ、日本人学生！

そう、直宮三家以外は皇族の身分をいわば剥奪されたのだ。その直宮で子供ができなかったのが２家。側室制度もない現在、絶滅の危機にあるのが皇室なのだ。（明治天皇も大正天皇も側室の子だ。）江戸時代ですら、そのような場合に備えて、四親王家が維持されていたのに、である。

まあ、最近の学生には、そんなことはどうでもいいのかもしれない。入婿が天皇になるという珍発想を、平気な顔で発表するのだから。これに対し、私は「かつて西洋で、王位継承者は国際政略結婚により、他国の王子や王女を迎えましたが、日本の皇室にはそのような伝統はないし、近隣ではタイ以外、皇帝や王がいなくなりましたね」と微笑みながらＬと韓国人学生を見て「貴方がたの国も共和国になり、ベトナムもフランス政府の傀儡だったバオダイを最後に王朝はなくなりましたから。もちろんドイツやオーストラリア、ロシアでも帝政から共和制に変わり、皇帝も廃されました。そ

れが20世紀の激動の一端です。女性宮家の当主に相応しい結婚相手を見つけるのは、確かに大変そうですね」と私は苦笑しながら言った。

この例外的な勘違いはともかく、どんな意見についても、きちんとその理由説明ができることが必要とは、このゼミに限らず、私が学生にいつも指導していることだ。「カジノ、女性宮家、そしてリニアモーターカー」においてもそうだが、私は学生たちの調査や考察が及ばない点を指摘し、異なった視点での見方や考え方を提唱する。そのことについて、前述Uは、「先生の意見を聞いて、批判的な視点でマイナスやプラスの面、魅力的な点を考え、自分だったらどうかということも踏まえて長期的な視野で考えることが大切だとわかった」と理解を示す。

カジノについて賛成する学生に「貴方は将来、そのカジノへ行って遊びたいと思いますか」と私が尋ねたところ、答えは「否」または「一度だけどんなものか見てみたいが、一度でいいしギャンブルをするつもりはない」だった。「カジノ賛成の方々が、カジノで遊ばないくせに、誰に行くことを期待するのですか。それで経済効果が本当に見込めますか？」と、私は突っ込んだのだ。さらに続けて、私は海外のカジノ事情について短く語った。

私自身、ロンドンでは英国王族もよく食事などに利用するリッツホテルを定宿にしているため、その地下に設けられたリッツクラブカジノのメンバーだ。ただし私自身はそこでギャンブルをしたことはなく、もっぱら英国人の親友を食事や午後のお茶に招く際に併設のレストラン・バーを利用している。会員とその同伴者で公的な身分証を持った２名までしか入場できないという排他的なカジノは、昔、上流階級の舞踏会に使われた宴会場に装置を並べただけなので、宮殿のように豪奢な雰囲気はそのままなのだ。ひとりの英国人親友は、食事前にカジノで遊び、必ずといっていいほど食事分くらい勝つ。つまり、ディーラーがヘタだと、カジノは儲からないのだ。

私が日本でのカジノに反対するのは、経営破綻を予想するからである。そこに税金が投入されてはたまらない。マカオのカジノも以前ほどの勢いはない。モナコのカジノも今世紀になってから３度ほど覗いたが、閑古鳥が鳴いている。観光客は多いが、豪華な建物を単に見物するだけのようだ。そもそも欧米各地にカジノはあり、決して珍しい施設ではない。シンガポールのカジノが順調なのは、他にこれといった観光資源を持たないおかげだ。とはいえ、そのカジノでさえ最近陰りが見えるとの報道もある。日本に投下された原爆が保管されていたテニアン島でも、約20年前に日本・韓国・香港の実業家たちが資本を出し合い、カジノ付きホテルが開業し、私も知人に誘われて2度訪れたが、その後、少なくとも日本の旅行代理店はここへのツアーを扱っていない。意外に思われるだろうが、ハワイでは州法でカジノ禁止だ。にもかかわらず、年中、観光客を集めている。カジノで集客なんて、いったいいつの時代の話なのだ？

このように、なににつけても個性的な意見ならば良いというのではなく、しっかりした理由が求められることを、ここに追記しておく。

〈結局は自分次第〉

大学において「『学ぶ』ということは、自分次第」とは当たり前だが、勉強ができないのは教え方が悪いからと責任をなすりつけられる可能性のある当方としては、この言葉を読んでホッとする。これは現代システム男子学生Nのコメントだ。

彼はやればできる学生なのだが、第一志望校に落ち、府大に入ったために「残念」という気持ちを引きずっていたらしい。おそらく府大には、そのような事情の学生は少なくなかろう。だが昨年度の私の英語クラスには、前向きな両面賭け（つまり府大に残った場合に希望の専門へ進めるように優秀な成績を取りながらも、仮面浪人として入試勉強もするというハードな学生生活）の結果、前年度に落ちた京都大学工学部へ見事入ることになった東京出身の男子学生Oがいた。拙宅へ挨拶に来て、「これなら東大にしておいたら下宿せずによかったかと思います」と言いながらも嬉しそうだった。

さてNによれば、府大の授業レベルも学生の意識もが低すぎるようで、耐えられないらしい。Oも、京大への再チャレンジの理由として、府大のレベルの低さを挙げていた。そういえば、私も神戸女学院大学英文科1年次の米人教授による英語授業は、同校中学並みのレベルと感じたが、もともと勉強嫌いの私は不満に思うこともなく、楽なので遊び癖がつき、その気分が今でも抜けないでいる。

ただ、そのような精神状態のおかげか、授業もまず私が楽しめるように運営しているのが、学生にも伝わるのか、Nは私の「話す内容に無駄がなく、時には図を適切に用いて、聞く側を取り込むスキル」に感心し、聞き方も「常に頭を動かしながら、巧みに要点をつかまれていると常に感じて」くれていたらしい。つまりは、私の行為をチェックし、そこから学ぶ、Nの言葉では「教授のスキルを盗もうと今も頑張っている」ということなのだ。前述のGも、「私の中で発表のお手本としていたのは堀江先生で、聞き手を引きつけるような話し方で、自分の経験、政治のあまり知られていないところ、ニュースの裏側の話などを交えて巧みに話されていて、とても圧倒されていた」とか。話半分に受け止めるとしても、私の「話し方」から学び取るという能動的態度が伺えよう。

私の言葉に無駄がないとすれば、それは、そもそも初年次ゼミナール開講の前年から「教えないように」と釘を刺されていたためだ。学生にできるだけ多く発言させる時間をとるべく、私自身は時には白板にアバウトな図を描き、最小語数で最大効果が発揮できるように心掛けている。（もともと、時間制限の厳しいテレビの生番組出演や、字数の少ない新聞記事原稿執筆には燃える性格なのだ。）とりわけ、今年度のように留学生にも理解してもらうには、簡単な重要語を板書する必要がある。そのため、例年以上に、キャッチコピーのような派手な文言を、白板上に表したかもしれない。

また今回は、「エリートになるため、自分に必要なことを３項目選び、過去一週間でこれらのためにどんな努力をしたかを発表する」という課題も出してみた。その結果、Gは「意識して行動することができた」とか。もちろんその裏付けをも提出させ

るわけではないので、口頭発表の場合、嘘八百を並べることも可能だが、案外、学生はそうしないものだ。

たとえば私の母校、神戸女学院大学院のネイティヴ女性教授による文学中心の女性学クラス（内容には全く興味がなかったが必修単位だったので仕方なく受講）において、やはり「この授業のために、どんな勉強をしたか」を講義冒頭に全員が報告させられた。

そうなると、なんだか競争心が煽られ、私ですら結構、関連書を読み漁ることになる。速読は得意なので、その量は同級生の申告内容をはるかに凌駕したため、教授から「私の授業のためにそんなに時間とエネルギーを使ったら、他の科目の勉強ができなくなるのでは？」などと心配されたほどだ。もちろん私のことだから、他のクラスにおいても恥をかかない程度には調べて臨んだに決っている。

だが、今年度の初ゼミでも、このちょっとした質問で、学生たちの日々の意識に変化が起き、勉学とは（当たり前のことだが）授業時間以外の自分の自覚と実践によるところが大との認識が植え付けられたように思われる。その結果、学ぶも学ばないも「自分次第」の答えが引き出せるのだ。

さて、府大で挫折感を覚えたNではあるが、第一志望校に合格した親友との電話で、あちらの大学自慢に対抗するべく、このゼミの話をしているとか。それが本当なら、担当教員としては自分自身に合格点（80点）をつけたい。学生の合格点は60点だが、プロである以上、教師の場合は80点というのが持論である。

要旨

初年次ゼミナールを担当して６年めになる。テーマは「エリートを目指すものには何が必要かを考える」と、毎年同じだが、今年度は中国人留学生と８年前に来日して以来、日本で教育を受けてきた韓国人学生が参加してくれた。

そこで今回は、彼らの存在を意識し、「日本における報道の自由度」について考えさせた。また２年前から行っているニューズウィークからトピックスを選んでのプレゼンテーションにおいても、今年は時間をかけ、全員に質問させることにした。

これまでは「エリートを目指すなら積極性が必要」とばかりに、発言の多い者、無口な者と学生が二分されていたが、今年はそれで中国・韓国人学生が取り残されないように、全員に発言を強制したのだ。

だが、これは杞憂だった。特に中国人留学生は、限られた語彙を駆使し、間違いもあるが丁寧な日本語で堂々と持論を展開する。

学生たちは、短い口頭発表をほぼ毎週、全員が行うことにより、資料の探し方や、聞き手が興味を抱いてくれそうな話し方や内容についても吟味するようになった。物事には立場の違いによって、さまざまな見方があること、「皆ちがって、皆良い」事態を認め、結局、勉強は「自分次第」とわかってくれたようで、たった半年間のゼミだったが、まともに出席した学生には有意義だったと思われる。